

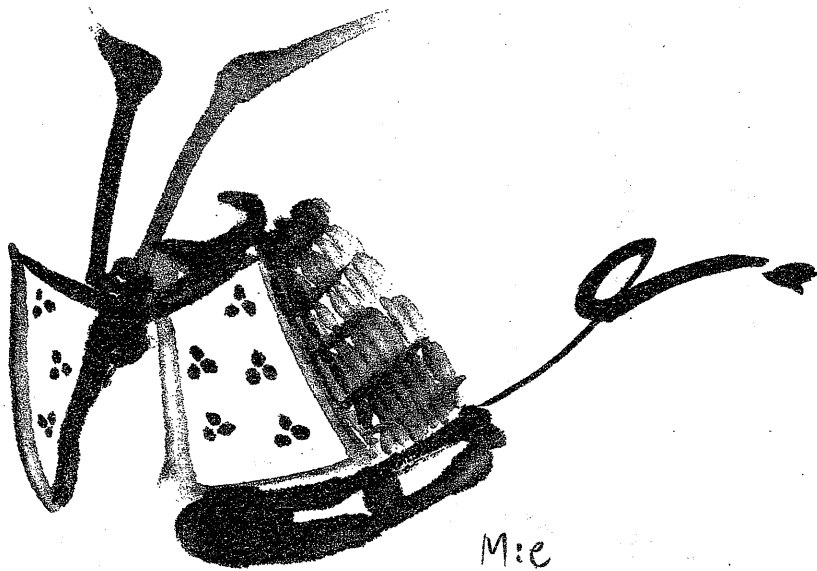
オリーブの樹

第66号

2007年1月31日

شجرة الزيتون

早期釈放！重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう！



目次

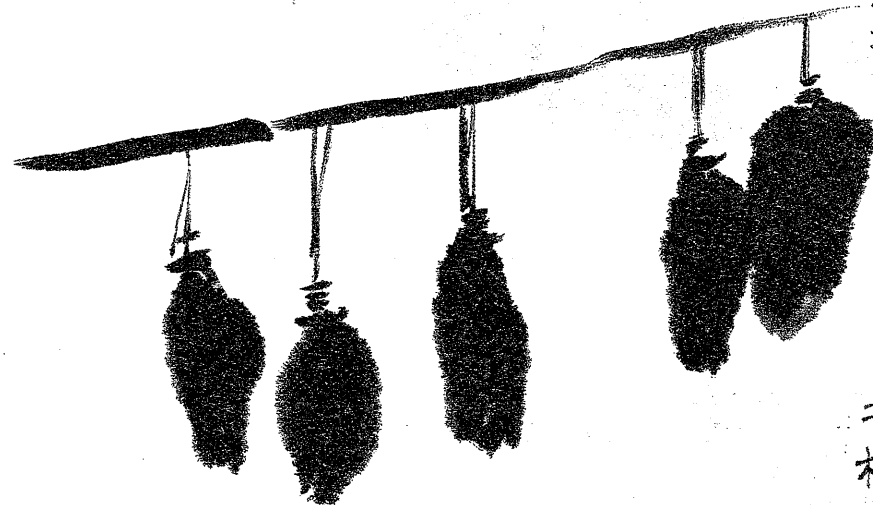
- P 2 一月の歌 重信房子
- P 3 独居より56 危険の中の希望よ育て 重信房子
- P10 重信さんとの交流コーナー
- P12 日本赤軍の歩み9 重信房子
- P19 シゲに捧げる「私小説」その59 山田美枝子

重信房子さんを支える会

一月の歌

重信 房子

初日の出探して眩しくふりかえる獄の陽だまりはとの一封
 仕事始め話す人なく過ぎ越して短い対話にほっとしている
 満月になぐさめられて正月の独房の宴独白の時
 冬の空満天の星地を包み争いの地に等しく輝く
 雨しきり寒さ厳しい独房に友の手紙届きて葉やぐ
 地面から霧たちのぼり天に舞う雪のベカーの草原も冬
 雪の夜凍る明るい道を行く我が兄弟の長き影追う
 落ち椿月に広がる寺の庭初恋について語りし君は
 夕間暮れ銀色に並ぶ駐輪場坂を上げればポロ市の時



干柿 Mie

晩居よい56 1月10~1月12日

危険の中の希望よ育て

重信 房子

1月1日 去年今年過ぎ行く時の真中で

インターナショナル独房にひびく

時報が鳴って、新しい年を迎えました。今年も新しい気持ちで去年の教訓を活かしつつ進みます。どうかよろしくお願ひします。

去年最後の年末の面会の時、メイから大学の友人たちの励ましの寄せ書きを見せてもらいました！ありがとうございます！「社会学」の大きな字、「現思研」など、みんなの友情を頂いて新年を迎えています。また様ざまに年末の便り受け取りました。ありがとうございます！そして、去年の末に、第二審の公判が4月19日に始まると決まりました。今年もよろしくお願ひします。

今、インターナショナルを独りで歌い、友人たちの顔を思い出して、ルーバーの向こうの暗闇を見上げつつ、新年の挨拶をしました。

昨年は、私個人にとって苦い年でした。2月23日の重刑の判決、その直後の耳下腺腫瘍という診断、そして、11月の卵巣嚢腫の診断と手術の勧告、さらに、秋に「もう一度パレスチナに行かねば」と、お便りを下さった知人が、師走も押し詰まってお亡くなりになりました。唐突な死に驚きと共に、悲しみが後からついてくるような思いでした。週末の新聞で訃報を知り、週明けに弔電を送りました。

“抑圧と不正許さぬラジカルな君の憤怒よパレスチナに在れ”と。

様ざまのことを考えつつ、新しい年の時間に至りました。今さっき、「紅白」が終わって、永平寺の除夜の鐘となり、その音に合わせてインターを歌い、新年に越えました。そして、新年の時報が過ぎると、少ししてラジオ放送は終了しました。東拘では、いつもは9時減灯時にラジオ放送は終わるのですが、12月31日から1月1日には、「紅白」から時報の後まで放送しています。

新年、パレスチナも、イラクも、レバノンも、現地勢力の一方への外部からの肩入れのために、中東地域は危険な時を迎えています。アメリカ、イギリスを中とする外部勢力は、現地の方を通して自分たちの要

求や支配を実現しようとし、また、現地の勢力も外からの力をバックに支配権を獲得しようとして、各地域の政治勢力同士の対立は激化しそうな新年です。

パレスチナでは、去年12月のアッバス大統領による「早期選挙の実施」の宣言を、イスラエル、米国、英国が支持し、動き出しています。ファタハ治安部隊への資金提供を行い、アッバス大統領のファタハを再選挙で勝たせることによって、ハマスを排除しようとする動きが活発になっています。つまり、パレスチナ人同士を争わせて、米、イスラエルと共同可能なアッバス大統領らファタハ勢力の権力を作り上げようとしています。

それに対して、12月下旬ダマスカスで、亡命中のリーダーたちによって開かれた会議では、アッバス氏の早期選挙実施を拒否することが宣言されたとのことです。この会議には、60年代後半から70年代、80年代、そして今までずっとPLOの国際局長を担ってきたファタハのファルーク・カドゥーミ氏も参加していました。他に、ハマスの指導者ミシャール氏、イスラム聖戦のシャッター氏、PFLPのタヘル氏らが出席し、早期選挙の正当性を認めないことを表明したとのことです。また、この間のファタハとハマスの流血の対立の原因の調査を要求し、街から武器の撤収を求めたとのことです。

しかし、ファタハが外部からの分断に呼応して、自分たちのヘゲモニーを確立する側に立ち、その資金と政治力をバックに早期選挙を求める限り、衝突は拡大再生産される危険があります。

また、レバノンでも内閣総辞職を求めるヒズボラやそれに共同しているアウンキリスト教民族主義勢力などの首相府に対するデモと、12月1日からのシットインは解除されていません。総辞職まで座り込みをつづけると対立がつづいています。

ここでもアメリカの介入によって、2004年に国連決議された「民兵の武装解除の問題」(注：2004年、安保理決議として、米、仏の共同提案を受けて可決した、シリア軍のレバノンからの撤退と、レバノン内の民兵勢力、つまりヒズボラとパレスチナ勢力に対する武装解除の決議)がレバノン内部の対立の要素になっています。

ハリリ元首相の暗殺、シリア軍の撤退などが2005年来の対立点ですが、レバノンへのイスラエル軍の侵略時には、国をあげてヒズボラの武装力に正当性を与え、シニオラ首相を初めとして「ヒズボラへの感謝」を宣言してきました。

しかし、停戦以降シニオラ首相は、侵略によって破壊された国土の復興の資金が必要で、米国の圧力やヒズボラの勢力拡大に脅威を感じて、なんとかヒズボラの武装力を解除させたいところです。加えて、ハリリ元首相暗殺に関する国際法廷をめぐる対立が、イスラエル侵略戦争停戦後、再び表面化しています。

国際法廷設置の安保理決議には、「レバノン政府の合意にもとづく」ことが盛り込まれているために、閣議決定が不可欠でした。ヒズボラや、シニオラ政権に批判的な閣僚は辞職したために、正当な閣議決定を満たしておらず、また「親シリア」と言われてきたラフード大統領が承認していないので、「レバノン政府の合意」としては成立していません。

ヒズボラ反政府勢力は、閣議決定の違法性を主張し、内閣総辞職と選挙法の改正を求めて、大衆的なデモと座り込みをつづけています。アラブ連盟が調停に乗り出したまま年を越えています。

シニオラ首相ら「反シリア勢力」は、ヒズボラとシーア派の拡大を押しとどめようと、ますますアメリカや旧宗主国フランスに協力を求めつつ、対立を強めています。このレバノンも外部の勢力の力を背景に、内戦の危機にあります。

しかし、レバノンは15年以上も内戦の中に過ごし、様々な経験を経て90年代に入って、やっと国の再建に至ったのです。どの勢力も内戦を避けようと必死ながら、妥協点が見出せず、対立は深刻化しています。

イラクは、混乱の中、おとといサダム・フセイン大統領が「処刑」として殺されました。拙速な処刑は、ブッシュ政権の中間選挙による敗北からの巻き返しとして、ブッシュの望むところであり、また、シーア派政権にとっては、新年に向けた「けじめ」として、自分たちの権力を示したかったのでしょうか。

こうした拙速な処刑は、イラクの現政権の正当性を損ね、今の政局においては、シーア派によるスンニー派への報復処刑としてしか中東の人々には伝わりません。中東全体に今ある矛盾や宗派的な差異感を拡大させて、さらなる宗教対立へと向かわせる危険があります。

サダム・フセイン処刑に責任あるイラク現政権を支えるシーア派指導者シスターニ師も、ヒズボラの闘い

を支持し、政権の一部をなすモクタダ・サドル師らはヒズボラに連帯し、反米反イスラエル百万人デモを呼びかけていました。

こうした勢力によるサダム・フセインの処刑はレバノンや他地域の宗派間の溝を広げます。

サダム・フセインは反米闘争において不退転に闘いつづけた「英雄支配者」であり、殉教者としてスンニー派のアラブの人びとの中に記憶されるでしょう。アメリカのやり方は中東をまったく理解していません。

ブッシュ政権時のペーカー元国務長官らによる「イラク研究グループ」のイラクに関する新しい提言が、12月に入って公表されています。提言は、アメリカ軍の段階的撤退と、イラン、シリアとの直接的話し合いを提案しています。つまりこれまでのブッシュ、ラムズフェルド路線を覆す内容です。

しかし、ブッシュ、チェイニーは、シリア、イランとの対話路線を認めないでしょう。なぜなら、シリアとの話し合いは、「イスラエルのシリア占領地からの撤退」にリンクせざるを得ません。それは「イスラエルの安全保障」に全て従属させるブッシュ政権のドクトリンを放棄することになり、今それはあり得ないでしょう。

また、どんな提案であれ、イスラエルの占領を許したままでは、中東ではどれも解決する内容になり得ません。

19世紀から20世紀と、かつての欧州の矛盾や中東への植民地支配のひずみが「イスラエル建国」として、パレスチナ人の犠牲の上に成り立っています。そのために、半世紀以上パレスチナのみならず、周辺の国々は戦争を強いられ、正常な建国ができないで来ました。そして、今も変わらず「イスラエルの安全」のために、イスラエルの「占領」も「核武装」も容認している米国のダブルスタンダードはつづいています。

そのことを差し置いて、反米反イスラエル勢力の自衛武装に対する武装解除要求が外からの介入によってくり返されています。パレスチナ人同士、イラク人同士、レバノン人同士を闘わせているものは何なのか？2007年、こうした危険の中で、住民に根ざした自前の民主主義はどのように育っていくのだろうか？

インターを歌いながら、「ワルシャワ労働歌」(暴虐の雲光を覆い、敵の嵐は荒れ狂う……)を唄いながら、「愛の賛歌」「旅人よ」など歌いながら、そんなことを考えました。

それにしても、パレスチナと違って、日本の2007年はすっきりしない厳しさです。情報は氾濫し見えて当然なのに、それが社会的な力になっていかないのか……。年金、福祉、医療の負担増など、暮らしの悪法、教育基本法改悪から、さらに憲法の平和条項の変更まで公然と語られながら、国民は賛成しているわけではないのに、その流れに流されているかのようです。

教育基本法に反対し、憲法改悪に反対する各層各地で、地を這うような闘いがありながら、日々の暮らしやニュースとして、それらをなぜかマスコミは報道しないのを当然のことにしています。体制的な報道の非政治的なことが「中立」のような不思議な自己規制です。「中立」などはあり得ず、それは一つの「中立」を装った考えなのに。マスメディアは、スポンサーと視聴率のためか、無難な番組作りのためか……。稀にはなく、何度でも日常の暮らしのTVとかのニュースとして反対意見が流れたら、もっと日本の活気も変わるでしょう。

「一つの意見があれば、必ずそれに反対する意見がある。それを伝える。選択肢を伝え、選ぶのは視聴者だ」としている中東のアル・ジャジーラの報道姿勢とはまったく違う世界です。アル・ジャジーラはアメリカの意向やアラブの政権の側からではなく、アラブの住民の側から報道してきました。政権の側からではなく、それを批判反対する側を積極的に伝えるメディアの登場は、時代の世界の流れです。「公正」「公開」によって、政権は健全化されるからです。時代のグローバルなネットやTVの中から、日本にもそうしたことが当然のようにいつか育ってほしいものです。

新年、点呼の後、掃除して朝食。去年と同じく赤箱と青箱の二つのおせち料理と紅白饅頭の箱が朝食時に配られました。赤箱には、数の子やかまぼこ、伊達巻、たこなど生物中心で、明日空箱を回収すること。もう一つの青箱は、3日に回収すること。こちらは、鱈の焼き魚、なます、黒豆、揚げ物など、正月らしいおせち料理が一通り網羅されていました。昼には切り餅3個と醤油味のスープが出て、お雑煮です。三が日は、麦の入らない白米になり、一食は切り餅付きです。

午前中は朝食後、おせち料理の姿を写生したり、手紙を書いたり、リラックス。午後に、短歌を作り始めたところ、共同通信がスポットニュースで、「よど号の田中義三元受刑者が今日未明亡くなった」と伝えま

した。びっくりして思わず手を止めました。12月中旬の新聞で「刑の執行停止で釈放」と出ていて気になっていました。「司法改革」で、公明正大に公表しているのか、それとも末期症状の情報がリークされてマスコミに載ったのかも知れないと、心配していたところでした。

田中さんは、大学時代の下級生であり、一緒にブント時代も活動していて、その後、赤軍派にも加わりました。当時の「現代思想研究会」通称「現思研」というのが、2部の私たちブント系のサークルでしたが、政経学部の彼のクラスは何人も「現思研」に加わり、一緒に活動しました。

今も当時の田中さんのクラスだったTさんとは文通交流しています。Tさんの11月の手紙に、田中さんに会いに行くことあり、田中さんの病気のことは書かれていなかったのです。12月に刑執行停止の記事を読んで、問い合わせの手紙を送ったところでした。

それが元旦の今日の死とは……。刑務所に居なければ、早期に病気が発見され、もっと適切な対処が取れたらと思うにはいられません。田中さんが若かった分、驚きもまた大きいものです。

考えてみれば、先に逝くか、後に逝くか、みなそんなに長い違いがあるわけではないのかもしれませんが。昔の学生時代のみなで腹を抱えて笑い合った当時のエピソードの数々を思い出しながら、独りで弔いの思いを述べました。ちょうど年末に当時の「現思研」の友人から学費闘争に関するサークル連合の合宿の頃の写真が届いたので、当時のみんなのことを思い出していました。

自分の命、友人たちの命を考えながら、遺書を書いておきたいような元旦となりました。

1月2日 定命といえども若き旅立ちに

二たび三たび友を弔う

獄中の正月は本当に静かです。他人と口を利くこともなく、時が止まったように過ごすこととなります。ラジオから、限られた時間、音楽やおしゃべりが流れます。今日は新聞も休刊日。昨日の田中さんのニュースも分かりません。世界の元旦の様子も分かりません。

とにかく、自分の領分はやっておかないと……と、検察側が控訴した検察控訴趣意書への反論として、答弁書骨子を年末に仕上げました。その草案の校正や修正の作業を元旦の夜から2日にかけて仕上げているところです。

それでも、今日の午後は入浴日だったので、駅伝の

実況中継を楽しみながら風呂の順番待ちです。順天堂大学の往路5区で驚異的な記録をラジオが話しているところで、風呂の順番がきてしまい、そのまま作業を中断して、午後は少し百人一首を楽しみました。官本に「百人一首」(安東次男著)があったので、年末に借りていたものです。子どもの頃は、中学校の頃まで、夏でも冬でも好きで、友だちと百人一首やカルタ取りをやっていたのを思い出しつつ読みました。昔はそらんじていた100首も、こうして活字で読み直してみると、あやふやだったり、意味違いだったり、新しい発見です。

トランプより好きで、カルタのように取り合うのから、絵札の方を並べて下の句から上の句を逆に引きあてるのまで、いろいろ遊びましたが、今では下の句から上の句を思い出すのはできなくなっています。百人一首の歌のリズムは子どもの頃から好きです。

十八番は、昔から「大江山幾野の道の遠ければまだふみも見ず天の橋立」でした。昔、父から歌の意味を聞いて、特に好きになったようです。この歌は、小式部の内侍の歌で、母親が当代一流の歌人和泉式部です。小式部の内侍があまりに歌がうまいので、母親に代作してもらっているのだろうとねたむ人々がいたそうです。それで、「まだふみも見ず」というのは、「踏み」と「文」をかけた言葉だと、父が歌の背景など教えてくれたものです。その頃を思い出しつつ、この本で歌を探してみたら、おおむね同じ説明が書かれていて、父を思い出しつつ読みました。

今日の献立は、星はまぐろの刺身10切れととろろ芋の小さいパック、豚汁、焼きそば。夕方は、お汁粉に切り餅3個、ほうれん草といかの煮物、大根のみじん切りの漬物、ミルクコーヒーです。2日は、年に1回の刺身の日と決まっています。

もう年末の差し入れの花、ストック、百合、蘭の花も枯れかけています。夜、すでに提出した控訴趣意書の校正ミスを点検し、これから提出する答弁書修正と作業に集中できて、少しの達成感で気分良好です。

1月3日 冴えかえる冬の満月見つめつつ

生きるということ考えている

年末から新年の休みはあつという間に過ぎて、後は明日からもう仕事始めです。休み中に作業していたものの点検、手紙などを整理して、明日の投函準備。そんな作業から、やっとなが改まったと実感した気分です。

今日の昼食は、うなぎと海鮮サラダ。わかめやてんぐさなど。食べ終わってすぐ、12時のニュースの後、昨日につづいて駅伝の実況中継が流れています。

投函物準備も一段落して、「パレスチナ・ナウ」を読みました。「パレスチナ・ナウ 戦争/映画/人間」というタイトルで、四方田犬彦さんの新しい本です。前に「オリーブの樹」にも感想を書いた「シオニズムと映画」を含む、イスラエルの映画や歴史、パレスチナの映画や人間を通して、パレスチナの現実を生きた人びとの姿として浮かび上がらせているドキュメントです。具体的な作品のあらすじを示しながらポイントを述べていて、分かりやすいものです。

はじめに、第1章『テロ』の表象』というタイトルで、1972年ミュンヘンオリンピック闘争に対するモサドの報復を扱った「ミュンヘン」のスピルバーグの作品を素材としています。「テロ」イコール「悪」を前提にして始まる「イスラエル人の苦悩」を語る「ミュンヘン」と対比させるように、自爆攻撃に至るまでをめぐる2つのフィルムとして、「アルナの子どもたち」「パラダイス・ナウ」を語っています。

「自爆攻撃を主題としたフィルムを批判する別の視座。狂気や英雄といったステレオタイプから限りなく離れた地点から、単純な肯定否定の二元論に陥ることなく、こうした作品が表象している死を理解することが我々に求められているのである」というところに、すでに著者の考え方や視座が示されています。

私にとって、それは「日本赤軍」を解散に導いた自己批判的な視座とも共通したものがあつたので、強く目にとまりました。そしてまた、著者のこの視座は第1章で『テロ』の表象』として語られつつ、終章で語られている「パレスチナの表象と日本」へと貫かれています。逆に、終章から第1章へと再びたちあらわれる思想の回文のよう、この「パレスチナ・ナウ」を記しているようにも読めるのです。

終章に述べられている「若松孝二・足立正生とパレスチナ問題」では、ゴダール作品から若松、足立映画の方法体現を対象化しながら、昔私も協力した「赤軍—PFLP世界戦争宣言」を語っています。また、終章の最後の「岡本公三の肖像」においては、著者が2006年、レバノンで岡本同志に会った時の様子が記されています。精神を病んでいる岡本同志との話の中に、自分が想像していた元日本赤軍兵士の姿はどこにもなかったことに落胆しながらも、「彼、岡本公三が現在あらゆる神話から解放され、市井に潜む匿名の中年男になりおおせたこと、英雄であることをやめ、普

通の人の状態に着地することに成功したのだ」と、著者自らの思いをとらえ返そうとしています。

それはまた、はじめの章で述べられている、単純な肯定否定の二元論、狂気や英雄といったステレオタイプから限りなく離れた地点、もしかしたら、市井にこそある狂気や英雄の欲求の側から70年代を問うきっかけを感受したのではないかと、思いつつ読みました。

それはまた、ひるがえって、私たちがつての「日本赤軍」がパレスチナの時代に連帯し闘い、その時代の攻防の中に生き、パレスチナに刻印された歴史を担った「リッダ闘争」を、相対化した地平においてとらえることを可能にします。「リッダ闘争」以降を闘った私たち一人一人の肉体や恣意をはるかに越えて、歴史に耐え得るもののみが刻印されていきます。

パレスチナの時代と希望に自らを重ねて、英雄でありつづけようとした、あるいは英雄的であろうとした自己の虚像をも解き放つものとして、日本赤軍解散がありました。「解散」は、ソ連、東欧崩壊、いわゆる「過渡期世界」の時代の転換をなす90年代からの懸案でありつづけたものです。2001年に解散し、それによって見えてきた己や時代、60年代、70年代の闘いのベクトルを自らの目的意志を離れた時代の側からとらえ返している、今の私の視座と感応します。

この「パレスチナ・ナウ」は文章も思想も明快で、収奪されつつあるパレスチナの文化への愛情と尊敬に貫かれていて、現在のパレスチナの歴史地平、文化、情況を知ることができてとても良いものです。

1月4日 初体操裸足で走る獣の隅

黄菊一輪年越して咲く

初始業です。2日に入浴だったので、次の入浴は明日となり、今日は運動日。28日から一週間ぶりの外気に触れる運動房です。

ビルの棟と棟をつないだ通路のコンクリート打ちっぱなしのベランダに、独房サイズの房が並んでいて、そこで運動するだけです。狭い中をくるくると走るしかありません。それでも、運動房に入る前にプランターの菊の花がまだ一輪、年を越えて咲き残っていました。黄色の小さい菊にふれて、匂いを嗅いでみました。見回しても敷地の遠くまで冬枯れの草がつつきます。それでも陽の当たるところに、少しだけ、もう新しい緑が芽を吹いています。まだこれから寒くなるというのに、走った後、裸足の足を水でジャブジャブ、たわしでゴシゴシと洗うのですが、晴天のため、それ

ほど寒くは感じませんでした。

房に戻って投函手続き。書類の送付には、まず宅下り書類の手続きが必要です。「紙は官僚主義」と、東拘に入った頃、私は日記に書いていますが、新聞の切り抜き願いまで手続きの書類への書き込み作成は、相変わらず大変です。手続きをあれこれしているうちに、もう昼食時間。今日はすっかり普段の食事に戻り、昼は海老天、切干大根にけんちん汁。

1月5日 初面会恩師の笑みに助けられ

声を囁らして初のおしゃべり

今日は恩師で弁護士先生の先生が見えました。去年から人と話す機会がなかったので、早速年始の挨拶をしながら、声を囁らして話をしました。歯が抜けてしまったなどと、還暦を越えた身体への退化を嘆き、80歳の先生に励まされてしまいました。それにしてもお若い！「ハハ……、髪は染めているからですよ」なんておっしゃっていましたが、お元気で、今も現役。12月10日の人権デーには、相変わらずご活躍の様子。

「年末の明大忘年会には行かれましたか？」とお聞きしましたら、「煙たがられたかねえ。諸君は誘ってくれなかったよ」などとおっしゃっていました。

公判のことも、先生の多趣味な話で盛り上がりました。骨董の話から、かつてレバノン南部のフェニキア時代の遺蹟のあたりをさんざん掘っていた友人から、緑青のさび付いたプレスレットの塊や古銭が出たからと、もらったことを思い出しました。また、シリヤングラス(ローマグラス)を掘り当てたとかで、もらったこともありました。欧州の博物館に友人がチェックしてみたら、かなりのものだったという話などして、当時の友人たち、広がる海や砂漠や緑の草原を思い出して、気分爽快。

そう言えば、友人にももらったアレキサンダー金貨をペンダントにしていたことを思い出しました。物持ちの悪い私は、それを人に上げたか、どこかに置き忘れたか、話をしながら当時はちっとも気にならなかったのに、今は何だか惜しい気分。歳をとったなあと自分を笑ってしまいます。楽しい年明けの面会に感謝。

去年の末に投函されていたものや賀状がどつと届きました。やっとながと繋がつて、時差を実感しながら、友人たちの年末の様子を知りました。知人のお別れの様子もその中にありました。

また、「オリーブの樹」65号をやっとなが受け取れました。3連休の後にならないように、去年発送し

てくれているはずなので、交付を要請していました。65号では、「オリーブの樹」編集室の方で、控訴趣意書掲載のまとめなど、活動が大変だったと思います。深謝。

また、この弁護側と被告の控訴趣意書を提出した直ぐ後の12月2日に、検察側控訴趣意書が裁判所から送られてきました。11月末提出で一段落と思っていたのですが、12月中、検察の控訴趣意書に反論の文書作業がつづいていました。これが答弁書というものです。まだその作業はつづいています。1月末の提出締め切りです。

検察の控訴趣意書の控訴申し立ての理由は、ただ刑が軽すぎる、無期徒刑を科すべしという内容です。曰く「懲役20年に処した原判決の量刑は著しく軽きに失して不当であるから到底放棄は免れない」として、その理由を、第1に、被告は日本赤軍設立から「ハーグ事件」まで、最高指導者であったこと、第2に「ハーグ事件」を主導した首謀者であったこと、第3に「ハーグ事件」が重大悪質なテロリズムであり、「ハーグ事件」以前のリダ闘争から「ハーグ事件」後の軍事闘争に至るまで、2000年逮捕まで、政治軍事指導者であったと主張しています。

そして、ことに、原判決の以下の部分を批判しています。「(和光が) 本件犯罪遂行上の重要事項のほとんどを決定していたと認められることに照らすと、被告人が、ハーグ事件当時において、グループ内における先達としての地位にあり、その中核的な立場にあったことは認められるが、組織を統括するリーダーとして本件犯行を主導したとまで断ずることはできないことからすれば、被告に対して、無期の懲役刑を選択するのは重きに過ぎ」と、原判決で述べていたことを覆し、何としても検察側は、軍事リーダーだったとして、重刑を科そうとするものです。

検察の第一審論告では、「ハーグ事件」がPFLP、アブ・ハニの指揮が明らか分、その前の「翻訳作戦」に関わりのないアブ・ハニを「翻訳作戦」をも共同したことにしていました。「翻訳作戦」に被告が関与していたことは、証拠上からも本人の証言からも明らかだったからです。「翻訳作戦」と「ハーグ事件」は、まったく別のものなのに、それらを第一審の検察論告は「PFLPとの共同」として同列に位置づけて、主張していました。

しかし、原判決では、「翻訳作戦」でのPFLP共同を認めず、日本人の単独の作戦とみなしました。そして、「ハーグ事件」まで「日本人独自の作戦」と認

認して、原判決を下しました。

第二審において、検察は「重信首謀者論」には「日本人独自の作戦」の方がよいと考えたのか、原判決の誤審に乗っかって変更しました。控訴趣意書では、「ハーグ事件は原判決が認定するとおり、日本赤軍が独自の作戦行動として実行したものである」と、乗り移ってしまいました。

しかし、PFLP指揮下で闘ったことは、第一審では、検察側が知っていて隠していた、1975年7月7日の毎日新聞の記事(カルロスらの「ハーグ事件」指揮を裏付ける小切手帳の存在などに、言及しているもの)を、弁護側も気づいて入手しています。カルロス自身の証言も得て、PFLP指揮下にあった点は、動かし難いものです。

また、検察控訴趣意書では、「ハーグ事件」以降の作戦に関しても、リダ闘争と同様に被告の責任を新たに加えて追求しています。2001年以降のブッシュの「反テロ戦争」に乗じて、とにかく獄に留め置くべしという論調です。「たゞ被告人を社会に戻すようなことがあれば、被告人が今後も国際テロ活動を続け、再び我が国及び国際社会の脅威となるであろうことは明らかであり、特別予防の見地からも被告人を厳罰に処する必要がある」と述べたてているものです。

怒りと共に答弁書を作成しているところですが、「刑事犯」としてではなく、「政治犯」として、反逆罪のごとく、政治裁判にかけられているような状況です。「我が国及び国際社会の脅威なんて?!」そんなオーバーな……と、笑っても居られません。重刑は作られていくからです。

フリージャとカーネーションの花が屈きました。初の花ありがとうございます。いい匂いです。

1月8日 白玉にお汁粉屋の配膳に 成人の日と改めて知る

6日は雨に始まり、3連休のために、東拘はまだ冬休み、正月休みのような状態です。それでも賀状や友人たちからの通信も届いて、知人や田中さんの不幸など、外の様子も分かってきて、私も少し気持ちの落ち着いた気分です。

6日の一日中の雨があけて、7日、8日と晴天。ルーバーの隙間の冬の晴れた空は、はりつめた反射する光線が美しい。

昼食にお汁粉が出て、今日は成人の日と思ひ至ります。答弁書の作業で、まだ気持ちは作業に追われてい

ます。去年11月に、控訴趣意書を仕上げるまでは……と、思っていたのですが、12月から答弁書早く終わって、あれも書きたい、これが読みたいなどと、あれこれ思いつつ、まずは答弁書を終えねばとラストスパートです。タイプされたものを中旬までに受け取って、校正し、また20日過ぎまでに外に返して、1月末までの提出にまたぎりぎりです。

その後、「卵巣腫瘍」の手術のことなど考えることにして、今はとにかく文書作業を終わらせたいところです。

1月9日 パレスチナイラクもまたレバノンも 危険の中の希望よ育て

今日から「防衛庁」は「防衛省」に昇格したとのこと。安倍首相の言う「美しい国」の「戦後レジームからの脱却」とは、アメリカに追随した日米を柱とする「反中国」のアジアシフトによって、「集団自衛権」を合法とする「軍事政治大国」の道に突き進むものです。こうした、ブッシュと同様の「冷戦思考」では、日本は孤立していくでしょう。

パレスチナでは、ファタハとハマスの衝突が伝えられています。ガザでの衝突は、西岸にも対立を作り出しています。ハニヤ首相は、「武器はあくまでもイスラエルの占領に対してのみ使うべきだ」と、4日、呼びかけていますが、散発的な衝突はつづいているようです。

また、イスラエルは、新年に入って、通常の攻撃と称して、西岸地区でもラマツラなどで、市民に対する弾圧攻撃を行い、死傷者が出ています。

ちょうど、紅海のシャルムエルシェイクで、エジプトのムバラク大統領との会議に臨んでいた、イスラエルのオルメルト首相は、「ラマツラの作戦は通常の行動。もし、無実の人を傷つけたのなら残念なことだ」と、平然と述べたとのことですが、アッバス大統領も「ラマツラの攻撃はイスラエルの平和と安全が嘘であることを示している」と非難しています。このように、パレスチナでは、すでに新年からイスラエル軍の虐殺攻撃がつづいています。

日本の新聞では、近頃あまりパレスチナ問題が出ていませんが、現地では、厳しさは増しこそすれ、減ることはありません。ガザ、西岸地区においても、イスラエルの攻撃とパレスチナ内部の矛盾は深まっているようです。オルメルト首相は去年以来、パレスチナ勢力の捕虜になっているイスラエル兵1名とヒズボラの捕虜になっているイスラエル兵2名の奪還を、軍

事的には解決できず、政治的な交渉を余儀なくされながら、軍事オプションも引きつづき強めているようです。

百万の移民のロシアユダヤ人(国民の7人に1人の割合とか)をバックに、ロシア出身富豪実業家のアルカディ・ガイダマクが首相に名乗りをあげたとか。イスラエルも支配層や社会構成も変わりつつあるらしいです。オルメルト首相も、人気は落ちたままです。その分、軍事オプションが多用される新年です。

1月10日 弁護士の初の面会あれもこれも 吐き出しつづける時間の限り

今日は、めずらしく大変な忙しさでした。「接見禁止」のため、ほとんど面会人は弁護士です。娘たちがたまに来るだけですが、今日は娘の初面会と弁護士2名の初面会が重なりました。午後、メイと久しぶりの新年の挨拶を交わしました。そして彼女の仕事の様子、学習研究の様子を楽しそうに話してくれました。正月は私の姉、兄弟やいとこたちと話をし、たくさん笑いあったようです。私の小さい頃の笑えるエピソードなども語り合ったとのこと。私の全然覚えていないことまで、弟から出たらしく、こんな面白い話と、姉からも手紙で知らせてくれていました。そんな話をメイとしているうちに、直ぐ、もう「ハイ、時間です」と言われてしまいました。面会はずっとあつという間です。

房に戻って、直ぐ、また渡邊先生の面会。年末の28日の弁護団会議のことなど聞きました。そして、夕食を食べ終える頃に、大谷先生の面会。先生も十分な時間ありませんでしたが、正月の挨拶など、こちらの想いを伝えました。対話し、人々と繋がっていることを実感することは、力が湧いてくるものです。

夜、校正など、答弁書作業や資料の読み込みに集中しました。

1月12日 イラクへの米軍増派新戦略 まだ人殺しが許されるのか

昨日、ブッシュ大統領は、対イラク新戦略を発表しました。米軍2万1千人を増派して、イラクを安定させていくというもの。イラン、シリアと対話し、関与させていくように、新中東戦略を立て直すべきとした元国務長官ペーカーら超党派の「イラク研究グループ」の提言を受け入れませんでした。ラムズフェルド国防長官は辞任したけれど、結局、彼の構想どおりで、これまでと同じ「対症療法」です。「新戦略」でもなんでも

もなく、「追加の派兵」に過ぎません。

ブッシュ政権は、自己矛盾することをくり返しています。イラン、シリアを排除しつつ、イラン、シリアと近いシーア派のマリク政権を後押しせざるを得ず、宗派対立を拡大しています。

マリク氏は、サダム・フセインに対して闘っていた苦しい時代、シリアに20年くらい居て、シリアと共に反サダム・フセインで闘っていました。本当は、アメリカとも現政権は矛盾を抱えています。

ブッシュ政権は、イラク国内ではヒズボラを支持するシーア派主導のイラク政権を支え、中東規模では、シーア派勢力を排除し、スンニー派勢力との同盟を打ち出しています。

「フォーリンアフェアーズ」に、イラク戦争を始めた後、“シーア派と同盟して腐敗した親米スンニー政権とは同盟を考え直すべき”などという論調も一時ありました。今回の増派は、イラク政権の解体を促進させてしまいそうです。なぜなら、政権を支える反米シーア派勢力の民兵の武装解除を実行するとしており、シーア派内の分裂を広げ、また、旧バース党を含むスンニー派勢力の登用によって、イラクの軍の増加をはかれば、政権自身の安定を損なう構造になり、ますますアメリカの軍隊に依存する政権にしていくでしょう。力で押さえることはできません。レバノンで、イスラエルが失敗したヒズボラ解体策動と同様に、自分たちに反対する勢力を軍事的に叩き潰そうとするアメリカ軍の増派は、反米闘争を拡大させるでしょう。

中東の人びとにとって、問題の解決のミニマム共通合意事項は、「イスラエルの67年占領地からの撤退」です。このことを抜きには、イラク国内のことすら、どのような押さえ込みも、増派も、新しい矛盾をまた作り出すでしょう。また、シリア、イランが関与しな

いままで、中東の安定はまったく作られません。

日本の中東政策の「国益」に沿った「独自性」を示すメルクマールとしてあった、イランのアザダガン油田開発は、去年10月には撤退を決めたようです。これは小泉政権になって、日本が米国の対イラン制裁も含めて、さらに米国に追随していったことを示していました。中東政策における「独自性」を棄てて、米戦略一辺倒へと進め、小泉政権以来、日本はイラクへの派兵のままです。侵略軍の一部をなしています。米軍の増派は、安倍政権の日本がどの道を歩むのかも、あからさまにさせていくでしょう。

もう本格的に寒くなりました。去年よりも暖かい正月だったようですが、6日の小寒に入って、だんだん寒さが本格化しています。暖房のない独房では、たくさん着てカイロを一つ腰に当てながらの夜の作業です。立春、節分の頃まで、寒さが厳しいので、皆さんもどうぞ健康に留意してください。

この「オリーブの樹」の号が出る頃には、もう立春まじかですね。やっぱり春がいいです！ では、また。
2007・1・12記

前65号のお詫びと訂正	
* 6頁左列20行目	キリスト教民主主義 → キリスト教民族主義
* 7頁左列下から5行目	イスラエルの犠牲 → イスラエルの攻撃の犠牲
* 13頁左列下から6行目	72年 → 74年
* 同右列25行目	ミュンヘン → ウィーン

重信さんとの交流コーナー

ルワンダの涙 (1)

■世界に見捨てられた国

ルワンダという国について、いったいどれくらいの日本人が知っているだろう。多少知識のある人でさえ、ルワンダとウガンダを混同していたりする(実際、この二つの国は隣国同士で、民族構成も同じではあるが、それぞれが主権をもった独立国家である)。まして、1994年にこの国で地獄絵図が繰り返されたことなど、日本人の大半は知るまい。また、世界中の人々も同様だろう。ルワンダは世界から見捨てられ、忘れ

去られていたのだ。恥ずかしながら、私自身も彼らを見捨てた側の人間だった。大統領暗殺事件後にルワンダで大混乱が起こり、多くの難民が周辺諸国に逃げたというニュースを耳にした記憶はあった。しかし長い間、そのことについて思い起こすことはなかった。私もまた、彼等の悲劇に耳を傾けることも、眼を向けることもしてこなかったのだ。

しかし、2006年1月に日本でも公開された映画『ホテル・ルワンダ』によって、ルワンダの大虐殺事

件が、ようやく世界の注目を集めるようになった。私自身はこの映画を見そこねてしまったのだが、雑誌やインターネットなどで、一体彼の国で何が起こったのかについて、多少の知識を得ることができた。しかしこの、実話を元にした映画で描かれた生存者たちは、実に幸運な人々だったのだということを最近、ある本を読んで知った。

『ルワンダ大虐殺 世界で一番悲しい光景を見た青年の手記』(レヴェリアン・ルラングア著、山田美明訳/普遊舎刊)——著者のルラングア氏は、ルワンダの主要民族のうち少数派であるツチ人の出身で、多数派フツ人によるツチ人大虐殺の際、フツ人の暴徒によって片腕を切り落とされ、さらに片目をえぐり取られるなど、瀕死の重傷を負わされながらも、奇跡的に助かった生存者だ。

1994年4月、当時のルワンダ大統領ハビヤリマ(フツ人)の乗った飛行機が何者かによって撃墜される。その直後、フツ人の武装勢力が蜂起し、ルワンダ全土でツチ人への大虐殺を繰り返す。それから主にツチ人を中心とするルワンダ愛国戦線(RPF)が首都キガリを制圧するまでのおよそ4ヶ月、約100日の間に130万人以上——ということは一日に1万人以上——ものツチ人が殺されたという。

ルラングア氏は1994年当時、15歳の少年だった。彼の描く虐殺の場面はあまりにも凄まじい。その日、彼を含めた一族4人は、教会(ルワンダ人——フツ人もツチ人も含めて——の大半はカトリック教徒で、ルラングア氏自身もそうだったという)の敷地内にある牛飼いの番小屋に逃げ込んだ。しかしフツ人の虐殺者たちは、容赦なく番小屋に踏み込んできた。そして、血の狂宴が始まった。

彼の父母、兄弟姉妹、祖父母、叔父たちや従兄弟たち——その全てが殺される。虐殺者たちは壮年の男だけではなく。その妻や姉妹、息子娘が参加していた。中には幼児と言ってもいいような子どももいて、まるで遊戯であるかのように死にかけたツチ人にとどめをさし、まだ温かいその遺体から、衣服や金、装飾品や時計などを無慈悲に剥ぎ取ったという。

彼は、母親が虐殺されていく様子を目の当たりにする。

「シボマナ(フツ人の男で、ルラングア氏の一族とも面識があった)はたっぷり時間をかけて母の腹を切り裂く。その時、母がこうつぶやくのが聞こえた。

『お父さん、お父さん、私は何のために生まれてきたの?』

また重傷を負った彼の伯父の一人は、殺戮者たちに

哀願した。

『銃で一息に殺してくれ。弾代は払うから!』

『いくら持ってるんだ?』

殺戮者たちの一人が尋ねた。

『千フラン』

『弾代にはたりねえな』……

フツ人の男は槍を振り上げ、伯父を突き刺した。……略奪を続けていた娘たちが、それを見て笑っている

ルラングア少年自身も惨劇から逃れられなかった。彼の手首は切り落とされる。

「左手が後ろに落ちた。温かい濃厚な液体がほとぼしる。私はその場にくずおれた」

わずか百秒足らずの間に、彼を除く一族の全て、43人が殺されたのだ。

その後、番小屋から逃れた彼は、再び虐殺者たちに襲われ、母の腹を切り裂いたシボマナの手で鼻を削がれ、左目を抉り出された。

彼も殺戮者たちに哀願した。

『僕を殺してくれ! お願いだから』

『何だ、ツチめ、まだ生きていいのか! しぶといやつだ!』

『自殺した方が身のためだ』とある男が言った。

『どうして俺たちが手を汚さなきゃならねえんだ!』

■もう死んでしまった神への祈り

「第1次世界大戦後、国際連盟はルワンダを戦利品としてベルギーに与えた。国家としてまとまっていたルワンダを分裂させるためにベルギーが利用したのはフツ族とツチ族の容姿の差。黒い肌には平らな鼻と厚い唇、そして四角い顎をもつフツ族に対し、薄めの肌には細い鼻、薄い唇に尖った顎と、よりヨーロッパ人に近い容姿のツチ族をベルギーは経済的にも教育的にも優遇。1933~34年にはすべてのルワンダ人をフツ族、ツチ族、そしてトゥワ族に分類し、人種が記されたIDカードまで発行する。ほとんどのフツ族とツチ族はそれでもまだ良好な関係を保っていたが、小学生にまで人種差別の思想がたたきこまれていくうちに、かつて統一されていた国家は急激に崩壊していった」

これは『ホテル・ルワンダ』のHPからの引用だ。簡潔ではあるが、ここに、ルワンダの人々の苦しみの源が示されている。欧米帝国主義勢力の権益をめぐる欲望とエゴイズムが、彼らを苛み、殺し続けてきたのだ。しかし、昨日まで隣人として生活してきた人々が、

ある日突然、虐殺者と犠牲者に峻別されてしまうという現実を、我々はどう理解し、受け止めるべきなのだろうか？

それにしても虐殺事件の情報を得ていながら、それを黙殺し、それどころかつい最近まで虐殺の実行者であるフツ人勢力に友好的態度——当初はフツ人を優遇していたベルギー政府はその後、多数派のフツ人優遇へと政策を転換し、フランス政府も一貫してフツ人を優遇・支援していた——を取り続けた西側先進諸国、とくにベルギー政府やフランス政府の姿勢には唖然とさせられる。

元フランス大統領フランソワ・ミッテランは、1994年夏に冷然とこう言い放った。

「ああいった国では、虐殺など大した問題ではない。虐殺がはじまったとたん、UNAMIR(国連ルワンダ支援団)軍を2500人からわずか270人に削減させた国際連合の決定(安保理決議912に基づく)の裏には、西側先進諸国の圧力があつたのではないだろうか。

また、教会人の姿勢もひどい。ルラングア氏の一族が逃げ込んだ教会の神父二人と修道女たちは、虐殺の危機にさらされているフツ人信徒を見捨て、UNAMIRの車で去っていったのだ。私たちの羊飼いは子羊を見捨てた。さっさと逃げた。……二人は小型バスに乗る前に、誰にもなくこう言った。

『お互いに愛し合いなさい』

『自分の敵を赦してあげなさい』
必死に助けを求める信徒を見捨てて、安全な場所に自分だけ逃げ去ろうとする宗教者の説く「愛」ほど、偽善という強烈な臭気をはなつものはない。
彼らの偽善を目の当たりにしたルラングア氏が、次のような祈りをもう信じていない神に奉げたとしても何の不思議もないだろう。

『まだあなたは存在しているのかもしれませんが、私はあなたを信じていません。……母は最期まであなたのことを信じていました。それはご存知でしょう。母がいくら祈っても、私がいくらお願いしても、全能の神であるはずのあなたは指一本たりとも動かすことなく、母を守ろうとしませんでした。……その唇は最後の最後まであなたの名を唱え、あなたを褒め称えていたというのに。……』

あなたには、無垢な人々を救う手さえないのですか？

彼らの叫び声も、助けを求める声も、悲鳴の声も聞こえないほど耳が遠いのですか？

涙を流す人々と共に、涙を流す心さえていないのですか？

か弱き者や小さき者を守るはずなのに、ゴキブリたちさえ守ることができないほど無力なのですか？

つまりあなたは、闇の中において盲目の眼差しで私を見つめるだけの無力な神なのですね？

しかしそんなことはどうでもいいのです。私の心の中では、あなたはもう死んでいるのですから』

日本赤軍の歩み

闘いの路線的な捉え返しとして

—9—

重信 房子

9章 党の革命から(78-79年)

1 当時の中東情勢

73年第4次中東戦争を経て、キッシンジャーのシャトル外交(兵力引離し交渉から和平交渉)は、着実に中東におけるアメリカの足場をきずきはじめた。エジプト大統領サダトは1977年11月、イスラエルを訪問した。そしてイスラエル国会で演説してイスラエルの国家としての存在を承認すると言明し、アラブ世界に衝撃を与えた。しかし他のアラブ諸国はそれにつながらず、「エジプトの裏切り」として非難した。そしてすぐ12月には、「アラブ6カ国首脳会議トリポリ宣言」を採択し、エジプトとの断交を宣言して、反イスラエル・反シオニズム戦線の戦略的立て直しを図ろうとした。

これまでもイスラエルは「イスラエルの国家としての存在を認めさせ、アラブ各国と個別直接の和平交渉によっ

て外交関係を樹立させる戦略」に立っていた。そしてその実現のために戦争や占領の軍事的対決を強化してきた。アラブ側は、「イスラエルの不当な建国占領政策に対し、アラブは一つという大義のもと包括的和平によるパレスチナ、アラブの領土回復」を求めていた。各国は個別交渉には応じず、アラブ連盟のもとに統一したアラブの側の包括的な交渉によって、被占領地の返還を求めていた。イスラエルと国交を持つ計画はなかった。アメリカの援助借款の約束のもとに経済再建をめざしたエジプトは、「アラブの大義」からエジプト第一主義に転じた。このサダト路線は、これまでのアラブ戦略を切りくずしていくことになった。

イスラエルは、一方にエジプトとの直接的「和平」を求めつつ、他方78年3月、レバノン侵略を開始し、南部地域を占領した。この時から2000年5月までイスラエルは南部レバノンを占領しつづけることになる。イスラエルの意図は、「カイロ協定」の無効を主張するレバノンキリスト教右派に呼応し緊張を高めることによって、国連軍をレバノン南部に駐留させ、レバノン南部からのパレスチナ勢力の攻撃に緩衝地帯を設けることにある。イスラエルのレバノン占領に対して、国連はイスラエルの占領を非難する決議を採択すると同時に、国連レバノン暫定監視軍(UNIFIL)の派遣を決定した。以来現在に至るまでUNIFILは、駐留している。

この78年3月のイスラエルのレバノン南部占領は、レバノン内戦の質をかえた。レバノン右派対民族主義左派とパレスチナ勢力の対立した内戦は、平和維持軍として駐留していたシリア軍も巻き込んで、たちまち反イスラエル・反シオニズムのアラブ規模の対決となった。これまでもレバノン自身他のアラブの国同様に、「イスラエル」の存在によって、建国以降戦争とパレスチナ問題の発生にともなって、正常な戦後復興が押しとどめられてきた。そのうえに新たなイスラエルの南部占領は、レバノン国内の政治改革を求める左派の要求やレバノンにおけるパレスチナ問題を一挙に反イスラエル・反占領問題に転換した。

76年来、レバノン・パレスチナ勢力対シリア軍の間に起こっていた戦闘による対立矛盾は尾を引いていたが、78年3月のイスラエルの南部レバノン占領によって、それは副次的な問題となった。シリア、パレスチナ、レバノン民族運動による強い共闘と連帯が生まれ、反イスラエル・反キリスト教右派の体制と陣型がとられるようになった。レバノンキリスト教右派もまたイスラエルと共同し、その支援を受けて反パレスチナ・反左派の内戦を闘うことになる。このようにレバノン内戦は、イスラエルの介入で長期化する性格に変容した。

こうした中で、1978年9月、エジプト・イスラエルの「キャンプデービッド和平合意」が成立し、79年3月、エジプト・イスラエルは「和平条約」に調印した。このエジプトの親米政策とイスラエルとの国交樹立・和解に対して、アラブ諸国は78年2月、「アラブ対決戦線」を形成し、「アルジェリア宣言」を採択して、冷戦下ソ連との共同を深めることをうたった。

同時期に他の世界では78年はベトナム解放戦争勝利から、ベトナムは中国との矛盾による国境での戦闘がはじまっている。そして12月には、ベトナム軍のカンボジアへの侵攻からベトナム・カンボジア戦争となり、のちに79年にはポルポト政権の「カンボジア人民虐殺」など衝撃的ニュースが伝えられた年でもある。また79年1月には、イランで革命が起こり、米国の中東における二つの戦略同盟国イスラエルとイランのうちの一つが崩れることになった。エジプトはイランにかわって、米国にとってはイスラエルは別格として、サウジアラビアと共に不可欠の同盟国となり、米国のエジプト経済支援はさらに強化された。イラン革命はまた中東地域の民衆運動に大きな力を与えた。レバノン左派やパレスチナ勢力と共同していた人々の中にもまたイラン革命の担い手もいた。

こうした激動の中、パレスチナの闘いはシリアと強固な同盟を組み、サダトの「キャンプデービッド和平合意」に対する対決を鮮明にした。79年1月、PLOはダマスカスで第14回PNC(パレスチナ国民会議)を開催し、これまでにないシリアとの協同関係を深めつつ、米主導の中東和平を拒否し、イスラエル承認に道をひらく「キャンプデービッド合意」非難の新しい政治綱領を採択した。

PNC政治綱領では「キャンプデービッド合意は、パレスチナ人の諸権利と唯一の合法的代表PLOを無視するだけでなく、シオニストによるパレスチナ占領を許し、中東アフリカにおける帝国主義者とシオニスト支配を強める陰謀である」とエジプト・イスラエルを非難した。そして「我々はパレスチナ問題が、アラブ・シオニスト紛争の中心・根本であることを確認し、帰還の権利、自決権、独立国家を樹立する権利を含むパレスチナ人の故国パレスチナに対する不可分の権利に反するすべての決議合意・和解を拒否する。これはとくに安保理決議242において「我々は」と、242決議を非難した。そして、「キャンプデービッド合意に対決することが全アラブ大衆とその民族

的進歩的勢力の責任であり、シリアとPLOを中核とするアラブ対決戦線を基盤に闘う」ことを表明した。

2 私たちの闘いの環境

77年5・30声明にみられる（実際には76年の綱領規約の確立にはじまる）方向は、

第一に、日本の革命運動に対して「待機主義」を反省してアラブにいなながらも積極的な問題提起をしていく方向に立った。これまでは国内に革命的潮流が形成されればそれと呼応していこうという考え方、合流論であった。しかしクアラ闘争を経て「連赤総括」や「東ア」の闘いを中心として日本国内の左翼の実情にふれることによって、自らが日本の階級闘争の当事者として、「階級の責任は一つ」という観点から国際主義と軍事を特性としたグループとしてイニシアチブを発揮しようとする方向にふみだした。

これはクアラ闘争で奪還された同志たちと組織がちがっていても共通認識を獲得しえた経験が大きかった。自らすすんで革命運動に参加し闘うものは統一しあえるという確信を育てた。そして共に闘う同志として足並みもそろった。党派や路線がちがっていても、共に闘う立場観点を一致するように闘えばかならず一つになれると、今から考えればそれを過大に評価する傾向があった。そのように日本の革命党形成にアラブにいながら重点を置くようになった。

第二に、しかしその実現にむけた主体条件は制約されていた。地理的にも離れているばかりか、レバノン内戦は国内との通信や交流条件をむずかしくした。ことにクアラ闘争で「超法規的措置」によって解放された仲間を防衛しつつ「非合法化」された中での闘いとなった。もちろんパレスチナ・アラブ解放勢力の間では市民権をえていたが、パレスチナ勢力同様にイスラエルや右派からの攻撃に対して保安体制を問われた中で、活動をするようになっていた。ことに南部戦場への日本人の駐屯は敵のターゲットになるということで、「日本赤軍」としての存在は不断に非公然の闘いである。レバノン南部の闘いは、訓練においても駐留においても日本人ということに注意深く打ち消して行なう条件が課せられていた。常に半断はPLOとPFLPの意志一致のもとで、安全機密対策を重視した形で組織的闘いが行なわれていた。

第三に、国際関係の拡大であった。私たちの当時の関心の中心は国内にあったが、国内との関係は限られた条件だった。また、国内はかつてのラジカルな運動は衰退していく局面にあった。それに比べPLOやパレスチナ勢力を通してアラブ・アフリカ勢力や欧州・アジア勢力へと、多くの共同の条件が広がった。政治討議、共同や相互扶助が拡大していった。ここでは、意欲的に政治討議が行なわれ「プロレタリア国際主義」や「組織された暴力」を対象化し問い返しなが、政治路線を改めていく契機を得た。

第四に、こうした条件下で、新しい組織としての機関活動や日常活動における「思想闘争」による団結、隊伍の育成がなされた。

組織的な闘いが自覚される前までは、それぞれが自らの興味によって軍事技術の向上や肉体的訓練、学習など、自然成長的な競争の論理にゆだねられた日常生活であった。団結ができ、組織的に闘うことで、力が発揮できるという確信は「わかった」と自己を肯定して活動していく中では否定的要素も生んだ。組織活動・団結を自己目的化していく傾向もこの時代生まれていった。

3 私たちの国際主義のとりえ返し

77年5・30声明の「団結をめざし、団結を求め、団結を武器としよう」の地平にそって、もう一度「国際主義と組織された暴力」の路線と「国際根拠地論」のあり方についてとりえ返し返していった。クアラ闘争、ダッカ闘争の軍事作戦を経ながら、国内での革命と主体形成に自己の役割を見出し地平から国際主義の路線的とりえ返しが重視された。

またPLOや他の解放勢力との政治討議も活発に行なった中で、そうした考えも強まった。共同や政治討議の中から、「赤軍派」的概念は英語を媒介に、よりシンプルで正確な概念に正されたことで、国際主義もまたとりえ返されていった。たとえば当時、「世界同時革命」という言葉は、トロツキスト潮流の党派性を示す用語であると知った。同時革命 (simultaneous revolution) という必要があるのかと、問い合った。現代世界革命は同時性を自明としており、党派性をおびた言葉は他のML主義勢力は使用していない、世界革命で十分ではないかなど、英語による

討議は、日本語の国際主義の中味を問いはじめた。

路線的なこうしたとりえ返しは内容を問い、その分、ゲリラ戦の意義も問い返されていった。

こうした国際主義や軍事路線の総括内容自身は、77年以降の日本赤軍総括として国際交流の中で問いなおされていたものであったが、それらは79年の5・30声明に表明された。

「国際主義と自力更生の立場をうちかためよう！」として、ブント以来の「プロレタリア国際主義」のとりえ返しとして総括的に表明したものであった。

「共産主義者同盟赤軍派の国際主義は、世界に対する神祕主義と一国的認識に規定されていました。革命の原動力を人民の力としてとらえきれず、暴力と党の“前衛性”に一面化してきたために、即自的な世界党建設を展望していました。革命権力の奪取形態における一國性をも否定し、一国的な社会主義建設過程をふまえず、国際主義を対置させる誤りを持っていました。そのために世界党に指導される世界同時革命の遂行を即自的にめざしていました」と、とりえ返した。そして自らの闘い方に対して、「現在からとりえ返しをみれば、パレスチナ・アラブ人民に依存し、パレスチナ・アラブ人民と共に闘うことを自己目的とした即自的闘いであり、義勇軍としての参加を否定しつつ、義勇軍的闘いによってしか、国際主義を実践しぬけていないでいた」。「日本赤軍がパレスチナ革命を指導しようとするのも、また義勇軍として指導されることも、それでは真に国際主義をつくりだすことはできません。私たちはパレスチナの革命組織を通してパレスチナ人民と団結し、パレスチナ人民は、パレスチナ革命組織と共闘する日本赤軍の闘いを通して、日本人民と団結しています。人民を階級的に代表する党の役割が正しく認識されてこそ真に対等な関係をうちたてることができます」と、当初の義勇軍から党的な共闘への自らの歴史のとりえ返しを示した。

そのうえで、「私たちは赤軍派からひきついできた古い概念『世界同時革命』、『国際根拠地論』を止揚する国際主義と自力更生の立場、日本革命の指導主体としての自己確立が客観的に問われていることをとりえ返し返してきました。そして“世界同時革命”という概念を時間的同時という意味としてではなく、いかに各国の革命の同質化を準備するのかという問題としてとりえ返し返してきました。それは“世界同時革命”を主張する私たち自身が同質性をどのよう日本革命につくりだすのかと問われていたのです。“一國革命”の同質化されない否定的現実と、“世界同時革命”を対置するのではなく、自らの否定的現実としてとりえ返し、同質化の方法と方向を具体的ににつくりだすことが、党の国際主義の任務であるからです。その意味で日本革命の社会主義建設内容とその道のりの具体性において、国際主義は問われています」と総括し、「“世界同時革命”ということばの抽象性を止揚し、日本革命の建国路線として提起しとりえ返し返してきました。日本革命として提起することが一國主義なのではなく、日本革命の中味が国際主義の思想的地平を持ち得るかどうかが問われなければならないからです」と総括表明した。

こうして、のっぴらぼうの国際主義、世界同時革命ではなく、日本革命の内実として国際主義的使命を規定すべきだと、とりえ返した。ここでは、パレスチナの「建国」にならって、建国路線という表現をしている。

そして国際主義の任務として、「第一に、自国民に依拠した主体的な革命の指導勢力をつくりあげること」であり、指導勢力を反帝の価値で統一していくように闘うこと。この戦略的団結を通して変革しあうことを求めた。そして第二に、「人民性の欠如の克服の闘い」として、人民の実際にとってどうか？という側から問うことを自らの傲慢や驕りの教訓としても、またこの当時の中国、ベトナムの対立問題の克服としても問っている。そして第三に、自己批判の党風の確立が指導主体に問われ、第四に、敵に対して味方が統一していくことを戦略的価値とすべしと求め、77年5・30声明の「団結をめざし求め武器としよう」という提起をふたたび国際主義の側面から総括として呼びかけるとしている。

当時「社会主義国家」間の矛盾や共産主義運動をめぐって、さまざまな矛盾があらわになっていく時代であった。ベトナム、中国の対立やアフガニスタンの左派クーデターによる人民性の欠如した「党のあり方」が問われていた。こうした党のあり方を正すものとして、当時革命の過渡にあった勢力が国際主義を問い合っていた。その内容を反映したかたちで、この79年5・30声明は、国際主義を「反帝と自力更生の立場」から党が闘うことを呼びかけている。そして自らも、世界革命の一部として日本における闘いを担うことを表明した。反米の国際的連帯に基づく自国帝国主義打倒を人民を主体とする革命路線によって、各国の闘う勢力と団結するという内容であった。この国際主義の表明に示されたように、ごくあたりまえの、そしてもっとも基本に立ち返った。

私たちの国際主義の出発点は、ゲバラの実践やレーニンの文献のアナロジーに触発啓発されてはじまった。ゲバラの国境を越えた自己犠牲の闘いや「他民族のために自らを犠牲にする覚悟」を問うたレーニンの信条を自らの闘いに重ねてきた。そうした闘いの中から心情はそれとして、革命の実現の現実的方途に立ち返った。ラテンアメリカの友やイランで、革命は勝利できる現実的問題として問われていたことが、私たちにもまた、勝つ闘いと、戦略を考えることを求めていった。

国際主義は世界の革命の一部として、質的に国際主義的内実をもって自国の革命をどう闘うかということに帰るべきだととらえ返したのであった。そして、そうであるがゆえに、国際主義者の世界共通の基準とは何か？と、パレスチナ組織やそれに連帯するさまざまな革命グループとも問いあい、「帝国主義に対決し、人民に依拠して闘う」というあたりまえの立場をまずもって確認した(反帝と自力更生の立場)。そのうえで不遜に党的勢力を媒介に全国各地の闘いが相互支援しあうように世界的な協同を求めるように闘うことをめざした。

この79年の国際主義のとらえ返しは、すでに75年以降、共闘組織間において、当時、「国際革命協議会」形成をめざしており、この79年の声明はその政治内容の一部を示すものであった。「国際革命協議会」は、日本で「日本革命協議会」を呼びかけていたものに照応する新しいインターナショナルの形成萌芽として位置づけていた。革命の権力奪取の過渡を闘い抜いている組織の反帝の共同戦線であり、ML主義を基準としていた。

しかし「国際革命協議会」をめざし路線は、政治綱領原則を定めたが、それ以上の進展は困難があった。非公然の連帯には実践上は機密や組織防衛上の条件もあり、多国間(多組織間)協議がむずかしい点があった。そのため二国間(二組織間)協議として進めた。国際革命協議会の理念として相互の立場を理解し、二国間(二組織間)においては、相互の教訓や経験を分かち合う形で、国際連帯は実践上も深まった。しかし、これまでのように政治宣伝としてのインターナショナルの形成を重視せず、非公然な団結を育てた。

こうした国際主義の転換はまた、「情勢の見方」や軍事に対する考え方の変化と不可分な関係にあった。

79年2月に発表した「主体的情勢認識を」では、すでに国際主義に対する考えの転換した側から情勢分析をとらえている。これは、77、78年のベトナム・カンボジア問題や79年のイラン革命に対する国内の論争を学習する中から、「問題の立て方にあやまりがあるのではないかと」と、国内に提起している。情勢をとらえる上で「両者のうち、どちらか一方がすべて正しく、他方が間違っているという白か黒かの二者択一でちがいを考える形式論理的な観点は、誤った情勢認識と実践を生み出します。ここからは、矛盾の本質をとらえられずちがいを克服できません。あらゆるものは否定と肯定の両側面を内部に孕んでおり、否定と肯定はまた、相互に転化しあう関係にあります。(中略)今のイラン情勢をみても、一面としては人民の解放の闘いの勝利であり、他面としてはいまだイスラム教の指導者によって指導されているという側面があります。それをイスラムが指導しているから反対だとか、逆に否定面をみようとしないう認識は、イラン人民の闘いに連帯し、共に闘ってゆくことを不可能にさせるでしょう」としている。

そして、人民の革命の目的意識性をもって現情をみると、階級対立そのものの矛盾は、資本主義的要素と社会主義的要素の闘争としてみることでとらえ、「この基本矛盾に貫かれて、現象的には五つの矛盾が大きく絡み合って現代世界をかたちづいています。それはまず第1に帝国主義諸国と社会主義諸国の矛盾、第2に帝国主義と第三世界人民との矛盾、第3に帝国主義本国内における独占支配階級と人民の矛盾、第4に帝国主義間の矛盾、第5に社会主義諸国の矛盾として存在しています。それが相互に規定しあった構造的な世界として、全体をとらえる必要があります。第1がすべてを規定しているだけなのではなく、ある時には第1が、第2が、第3がというように、条件、場所によって相互規定しあっています」と、現情認識のしかたをとらえ、ベトナム・カンボジア問題、中国路線批判などを提起している。

そして3月には「社会主義建設の矛盾を正しく解決する為には、この間のインドシナ情勢に対して」の見解を表明した。これまで「情勢分析」と主体的実践を切り結ばずにきた赤軍派の教訓として情勢分析をとらえようとした。過渡期の冷戦下にあった当時の条件の中で、情勢を解明する手がかりとした。それらはまた、国際主義のあり方を問うものであった。

またこうした国際主義の考えの転換は、これまでの軍事闘争のあり方もまた変化させた。人民性のない闘いはしないという考えが、79年軍事的にも明確に総括として基準化された。当時議論されつつも、「戦術を自ら狭めない」

として公表したり、深めたりしてこなかったが、「人民性のない闘いはしない」観点は確立された。しかしもちろん軍事闘争自身を否定していたものではない。また私たちの存在自身自衛武装の内戦下で闘っていたものであり、革命における軍事闘争は不可欠であると考えていた。ただこれまでのような人民を楯にする奪還闘争の「人質作戦」形態は否定すべきだととらえ返した。

ここで、これまでの奪還闘争「人質作戦」に対してもふれておきたい。当時は国際的な環境の中で、奪われた仲間を戦場に取戻す闘いは、ごく自然に世界中で闘われていた。その中に私たちの闘いもあった。

同志を奪還する、取り戻すことは、平和的な方法もあれば非平和的な方法もある。当時の私たちは、力量と考え方の限界もあって、「人質を取る」という形でしか担えなかったという弱さがあった。こうした「人質作戦」は、さまざまな理由で、当時正当化したが、こうした闘いは、結局人民を楯にする思想であり、過ちと未熟さがあったことを被害者に謝罪しておきたい。しかも奪還されたパレスチナ戦士たちは戦場に戻り、社会活動、政治活動の条件も場も与えられ任務を担った。私たちの闘いの限界と一面性は、国内から奪還した同志の国内における闘いの条件に配慮が欠けていたと同時に、以降社会的な活動の場を保障しきれずにいた。また闘いに参加した人々を守りきれなかったことも、時代の限界とは言え、自己批判しておきたい。

4 「思想闘争」とその限界

クアラ闘争前後から組織的にもちがう歴史を持つ仲間たちと団結をつくりあげてきた確信が団結を政治的総括から日常生活全般へ適用し深めた。

総括を通してこれまでの日本の運動のあり方をとらえ返し、また自らのストックホルム逮捕供の隊列の弱さをどう共産主義的な隊伍へと獲得していくのかは、75年以降大きなテーマであった。攻防の激化の中で、どのように味方を革命を守る組織力量に育てるか？ 76年綱領・規約の成立以降、リーダーシップを負うようになった私自身それを考えつづけていた。少ない人数でも、みながリーダーシップを持って、中核的な役割を果たせれば、組織的な力量は実体以上に力を発揮できる。どのように味方の主体力量を形成していくのか。今からとらえると、そうした主観的要素を重視し、それを自己目的化していく方向へと、内向きな活動をつくりだしていったと思う。

「ストック」の敗北の経験から共に克服する方向はクアラ闘争の中で出会った仲間たちと共同総括の中から綱領と組織の規約へと集約されてきた。敗北をのりこえつつ教訓と同時に隊内の団結をつくること、それらを「自己批判を指導性とする団結の実体化」として、日常生活での自己点検、相互点検を重視し「思想闘争」と呼んで、それを方法化してきた。

77年出版の本『団結をめざして』にすでにあらわれていた傾向であるが、「思想闘争」によって何でも解決しえるという万能の方法としていく傾向があった。

「私たちのそれまでの態度は、人民よりも自分たちを大切に、武闘を自己目的化し、またそれをもって自己の正当性として、自らを絶対視して、対象変革をしようとしてきました。しかしそれは自己に合わせて世界をつくりあげようとするものでしかなく、客観法則に合致するはずもないので、必ず敗北します。自己批判(自己改造)一批判(対象変革)活動の実践こそが、不遜に私たちの思想を改造し、より人民のために闘う立場、もの見方、考え方をくりあげていき、党と人民の階級への組織化を実現していく運動であることに気づきました。(中略)不団結であることに気づかず、不団結でもかまわないという考えに立っている時、思想闘争はさして重大でないように見えるかもしれませんが。しかし革命は思想戦であり、人民内部の矛盾は、思想闘争によって自己を革命する中で他に働きかけることによって解決することが出来ます。すべての実践は思想闘争であるように、実践と切り離された机上や頭の中での思想闘争はなりたちません」(『団結をめざして』[77年]より)。

この77年の本にも示されているが、団結によってちがう質のひとびとと共に闘える体制ができたという確信は「思想闘争」を万能のように重要視した。ことに「同質化」を求めあう党形成を前提としており、社会的運動、人民との共同の条件が少ない分、「実践と切りむすぶ思想闘争」のつもりで隊内での内向きな日常生活の検証に陥る傾向があった。

こうした日常生活の「思想闘争」は、当時、未来の社会の原初的な形態として団結をつくりあげる自己組織変革

の方法と考えていた。「連赤」の教訓を学びその敗北した隊内団結を総括し、「あやまちを認める勇氣」、「人間に対する考え方や同志愛」、加えて「指導の自己批判の欠如」としてとらえて重視していった。自己批判を指導性として団結をつくりあげることによって、謙虚にまずもって向き合い、さまざまな難局を統一した力で闘いぬいてきた。こうした経験をふまえて、団結し得たという自己肯定の上に「思想闘争」を押し進める中で、観念的傾向が生まれしてきた。

観念的な傾向が生まれた理由は、

第一に、これは内戦、空爆に身をさらさないという防衛条件の中で、社会的実践の場が限られていた。総括地平を社会運動に返して、対象化し得る場を持ちえないまま、主観世界を重視した「思想闘争」を万能としたあり方が続いたこと。

第二に、団結を自己目的化したこと。クアラ闘争以降の団結を過大評価し、闘いの方法である団結を目的化した日常活動に一面化し、政治意識の欠如した生活の総括に陥ってしまったこと。

第三に、その分、くり返しの自己批判が形式的になり、総括会議で言うことに価値が置かれていった。統一が導かれ、内容が問われないまま観念的に一致を考え実践力を重視しないでした。

第四に、76年に綱領草案と規約をみな総括を結集してつくりあげた時、日本赤軍を「政治軍事組織」と規定した。そして組織とその活動を軍事体系としてととのえ、「指揮に従う」体系が重視された分、その否定面として、下から上への批判活動が活性化しにくい構造を作りだしていた。そのことに気づかなかつた分、批判活動が形式に流れた。

第五に、指導の位置にあった私や何人かのできたての「指導部」は、人間関係の波風のたたない団結を第一としていた。隊内団結こそ勝利の第一の源泉だとして自らの自己批判の牽引性をもって団結をつくらうとしていた。指導の側も手さぐりの中で言っていることに価値をおいていく観念的欠陥を孕んでいた。このように党形成のあり方に誤りも欠陥もあった。

党形成にむけたこうした「共産主義化」や「隊内同質化」はつねに「同一であること」を求め、異質であることを見つけては是正しようとする。「同質化」と言った時、何をもち同質化し得るのか？ ちがいにに対してどういう態度をとるのか？ 私たちは「連赤総括」の中から、あやまちを認める勇氣を持ち自己批判を軸に団結し合う組織はつくれると確信した。同志愛を重視した団結を意識化し、「連赤」の過ちを克服する視点を持ったと確信した。しかしそれが時として社会的実践がない分、「同質化」が狭い人間関係でのちがいの批判として、是正を求めたことになったりした。それは批判している方は「援助」であり、批判されている方は「つるしあげ」にすぎなかった批判活動もあった。

「同一意見を持つこと」がかならずしも「同質化」ではない。「同質化」を強調することによって、多様性やちがいの中にある批判や発展の契機が、「よくないもの」として排除されていく不寛容を生じていった。「異議なし」の世界に安易に導いていくような指導のあり方であった。それはまた、大したこともない小さなちがいを大きなちがいに広げてしまうことも起こしてしまい、不団結にも転化した。団結に向けみな試行錯誤の中で主体的変革を目指していたがこうした限界もあった。

この当時の批判活動の欠陥は「組織」のあり方の欠陥でもあり指導の欠陥でもあった。「思想闘争」における対等平等な批判活動を通した団結は、不断に上意下達式の「指揮に従う」という日常活動によって、上部への批判が活性化されずいた。軍事組織の保安機密重視の体制は、実践検証をむずかしくしていた。政治的な討議も軽視していく傾向があった。「思想闘争」は、そこで活動が「組織的」に行なわれている分、自己満足的に進んだ。

私自身からして観念化しているそのことに無自覚であった。自らは自己批判を通して団結を育てていると思っていたが、今からとらえ返せば、指揮に従うことを求め変革の力が育ちにくい物質的、組織的根拠をつくっていた。

「指揮に従う」つもりが創造性を損なっていた。指揮に従う安直さに流れ、他人まかせの活動や観念的な姿があった。この傾向は軍事訓練の中でもパレスチナの共同活動の中でも、「指揮に従う」と「待ち」の受動的な活動だったことを指摘された。また保安上も実践上も危険な失敗の中でも決めただけで実行に移されないことに気づかされた。

それら失敗を具体的に検証し、「党の革命」を自らに課し、新しい闘い方をめざすことになった。当時自覚した私たちの姿は、第一に、会議の決定に価値を置いて、決定がどう実行されたのか、されなかったのか、フォローアップ

していない観念的組織活動であったこと。第二に、「思想闘争」という日常の批判活動が日本の階級闘争や運動の政治動向やパレスチナ革命の実際の政治と切りむすべていないこと。第三に、綱領や規約と組織活動のあり方の乖離を自覚したことであった。私自身言っていることに価値を置いてきた。やっていることを対象化しきれずにきたと強く自覚し自己批判した。そして、「異議なし」の世界を出て、ちがいを自覚し、そのうえで、政治路線政策によって闘う体制をつくるために、「党の革命」と呼びかけた。この「党の革命」は79年8月のことであった。ここから再び日本赤軍の70年代総括さらにはブントから赤軍派、日本共産主義運動総括をもとらえ返し、政治路線的に再確立をめざした。

70年代総括として、これらは81年末第2次綱領草案へと集約し、以降80年代の闘いを規定していくことになる。これらの総括内容は、「無謬の党観」を否定した新しい党観にもとづく、主体形成論として、のちに『大地に耳をつければ日本の音がする』として出版されている。

投稿

シゲに捧げる「私小説」その59

山田美枝子

高校時代、シゲは文芸部に所属し小説を書いていた。私は同級生として、愛読していた。今、私は小説家を目指し、シゲは独房でふたたび小説を書きたいと思いはじめているという。彼女のために私小説をつづけます。

「新しい小説というのは、現代では、もっともエッセイに近いね」

A先生が講師席にへばりつくように座っておっしゃる。

「そのエッセイと随筆との違いだが、エッセイは専門家がその道のプロとしての独自のフィルターを通して見たことを書いたものでね、そこが随筆と違いますよ」

私は分かったような気持になった。年老いたA先生は、カルチャー教室で、同じように年老いている男女の生徒たちをひとにらみしてまた続ける。

「大事なことは、現在を書くということ、過去に何があった、私はこう思ったなんて書くんじゃない。いいですか、文章は下手でもいいんですよ、うまく書こうなんて思っちゃいけない。小説の文章は新聞の文章なんかと全く違いますよ、見たままを下手に書く」

下手にねえ、と私は反駁してみるがよくわからない。

「主人公が階段を二階からとんとんと降りてくる、そして玄関の戸をがらりと開ける、と書くのが小説ですよ。そして読み手はその主人公と共に新しい世界に歩き出すんです」

私は、やはりA先生は素敵なことをおっしゃる、





つづく
Mie

重信房子さんを支える会とは

重信裁判は、「パレスチナ解放闘争との連帯を起点に、日本社会の変革を追求した日本赤軍兵士の重信房子さん」にかけられた、長期勾留を目的とする政治裁判と言えます。その為、公正な裁判を求め、社会の不正に疑問を持つ有志が集まり、「重信房子さんを支える会」として、01年4月より救援活動を始めました。

重信公判の争点は三つあります。

- ① 74年にXさんが日本出国のために使ったとされる旅券偽造への関与。
- ② 74年、フランスで不当逮捕されたメンバーの奪還作戦として闘われたオランダ、ハーグのフランス大使館占拠での逮捕監禁・殺人未遂容疑への共謀・共同。
- ③ 00年の逮捕時に使っていた旅券偽造。

重信さんは、③は認めていて、関係者に機会あるごとに謝罪を表明しています。しかし、①②については、全くの無実として争っています。

私たちは、運動の柱を次の2点に決めました。

- ① 裁判維持に必要な救援実務とカンパ集め。
 - ② 世直しを求める人々との語り合い、交流の場をつくる。
- 「オリーブの樹」は、この目的のために発行しています。

公判予定

重信公判

04月19日(木) 13時15分 第1回控訴審

西川公判 506号法廷

03月30日(金) 13時15分 第一審判決

和光公判 725号法廷

05月09日(水) 13時15分 控訴審判決

後記

東京の高層ビル街を俯瞰した映像が映ると恐怖を覚える。上海やシンガポールの高層ビルの映像にも同じ思いをする。テレビではインドの都市の高層ビル群を見た。高度成長とやらを経験した後でこんなことを言う資格は無いのかも知れないが、しかしこの“発展”はどこまでつづくのだろうか。いい加減でもういいではないか、つましくありたいといった思いが深い。この恐怖心は人間の危機予知本能なのかも知れない。

ある集会で、一昨年夏にイスラエルが撤退したパレスチナ・ガザ地区のごく最近の現実を示す映像と報告を聞いた。国外で働くことで生活している人たちはイスラエル以外につながるエジプトに接した唯一の通過・封鎖ポイントに集まる。しかしポイントの開閉はイスラエルの恣意でいつ開くともわからない。約長辺43キロ、短辺10キロのガザ地区はイスラエルによって完全支配されている。レバノン攻撃やイラク報道の陰でガザ地区は民族抹殺の場となっている。このパレスチナ圧殺にハマス政権経済封鎖で日本も加担している。

ラジオは参議院国会中継である。醜い“美しい国日本”のことはもう書く気もしない。

ペランダでたばこをしていたら、通りかかった美人の白黒斑点の子猫と目が合った。しばらく見つめ合った。今日は晴天。風もない。小春日和である。青空をバックに大小の裸木の枝が美しい。 Q

連絡先 〒105-0004 東京都港区新橋2-8-16 石田ビル4階

救援連絡センター気付 「重信房子さんを支える会」

郵便振替 00110-4-613941 オリーブの樹

銀行口座 三井住友銀行 赤羽支店 226-3687269 オリーブの樹

www.geocities.jp/setfreemarian/index.html

頒布価格 500円

「正誤」表

第66号

- ①7P右下から20行目 ~をさんざん掘って→の塹壕を掘って
- ②10P左6行目 マルク氏は→マルク氏とタラバーニ氏もまた
- ③13P上から20行目 78年3月イスラエルの南部~
→78年3月イスラエル軍の南部
- ④13P下から9行目 第14回PNC(パレスチナ国民会議)
→第14回PNC(パレスチナ国民会議、パレスチナ民族評議会とも訳される)